

「物的産業とサービス産業の基本的相互関係は、物的生産の活動が主軸となって…サービス活動はその発展に依存しつつ実現される」場合が多いことが実証される(119頁)。(3)影響力係数と感能度係数をもとめた結果は、当然のことながら、影響力係数は商業、運輸、通信、金融・保険、個人サービス、その他サービスの各部門のすべてで、いずれも全産業平均より低く、感能度係数は、商業、個人サービス、運輸、その他サービスの各部門が平均より高く、金融・保険、通信の両部門は、平均より低い。

まだ多くの興味深い結論がひきだされているのだが、ここでは紙数の関係で紹介はこれまでにとどめたい。これらの結論は、漠然と考えられていたサービス業のもつ特性を、かなりはっきりとえがきだしている。サービス業の物的生産への依存という性格は、かなりたくさんひとが指摘してきたことであつたが、これを計量的に示したことはきわめて興味ふかい。それは、経済の構造分析の武器をつくりだし、みごとに適用した好例である。

ただ、この部分について問題と考えられるのは、著者も指摘しているように、現在の産業連関表が、サービス業をあまりにもコンベンショナルにあつていて、そこで用いられる産出高などが一様に定義されていず、そのためにかなりの難点が生じていることである。商業などの場合、定義のいかんによって分析結果にかなりの相異が生ずることは予想される。これは、ややムリな注文かもしれないが、サービス業の分析を行なうためにふさわしい産業連関表を作成することが必要であり、少なくとも、産業連関表における定義の問題を考えなおす仕事がこのように思われる。

以上、この好著を紹介しつつ、若干の私見をのべてきたが、終りにこの労作に重ねて敬意を表したい。

〔中村隆英〕

F・L・プライアー

『共産主義外国貿易制度』

Frederic L. Pryor, *The Communist Foreign Trade System*. The M. I. T. Press, Cambridge, Mass., 1963, pp. 296.

I

著者のフレデリック・プライアー Frederic L. Pryor は、アメリカ人であるソヴェト経済研究者としては、新人であろう。評者は、彼の関係労作としては、雑誌『ソ

ヴェト・スタディズ』*Soviet Studies*の1962年7月号に発表され、本書のなかにも引用されている論文、「共産主義貿易理論」“Communist Foreign Trade Theory”を知っているだけである。本書のカヴァーに記されてある経歴によれば著者はオーバーリン・カレッジ Oberlin Collegeで化学のB.A.をとり、イエール大学で経済学を学んでM.A.とPh.D.をとり、現在ではミシガン大学の経済学の助教授でロシア研究センター The Center for Russian Studiesの所員だということである。本書全体を通読してみても、新人の几帳面と冗慢とを同時に感ずることができる。

II

まず、本書はどのような内容の書物であるか。それにひとくちで答えると、社会主義諸国の貿易が提示する諸問題を、そのオリジナルな資料を使って分析し、西側の研究者としての自主的判断を下そうとする、かなり詳しい研究である。そのさい、著者は、資料の関係から、アジア諸国をのぞき、叙述の範囲をヨーロッパの社会主義諸国に限ったと述べている。実際には、ドイツ民主共和国DDRの資料をもっとも多く使っているが、取扱う問題によっては、必ずしもドイツだけに限られない。

この点に関連して、やや傍道にはいることになるかもしれないが、著者が公刊資料だけにあきたらず、現実にドイツ民主共和国内にはいり、そこで多くの官吏、貿易関係者、学者との接触をもとめたことをあげておかねばなるまい。そのために著者はスパイとされ、約5ヵ月余りを共和国の政治警察によって留置され、取調べをうける。著者はこの書物の序文で、「この本は著者が逮捕されたあとに車のなかで見つかったもので、『スパイ文書』にされたものだが、果してこれが『スパイ文書』かどうか、読者自身で判断してもらいたい」という趣旨の忿怒の感情のこもった陳述をしている。『スパイ文書』ということではできないが、少なくとも社会主義貿易に好意的な——でなくても、内在的に批判的な——書物ではない。ソ連でもドイツ民主共和国でも、本書が社会主義貿易を理解するために最適の——でないにしても恰好の——書物とされることは、まずあるまい。「東」側の関係文献に親しんでいる者としての感じは、著者の視角なり、文章のスタイルなどにどうもなじめないし、評者からいえば初歩的な問題にこだわっている箇所もないではなかった。

III

では、なぜ本書をこの場所で書評の対象としてとりあげたのか。それは、日本人であるわれわれが、現在ソ連

および東ヨーロッパで起こっている貿易問題や貿易理論問題について、一応の、入門的な理解を得るには、とくにロシア語やドイツ語の読めない人のためには、恰好の入門書だと思うからである。あとでものべるが、著者がここでとりあげている問題は、日本語ではまだどこにも紹介されていない、社会主義国における交易条件論争や価格決定基準にかんする実際的理論的論議を、かなりくわしく紹介しているからである。そういう意味で、評者は、本書をわが国の関係者にたいして推薦したいと思う。もっとも、いまここに書いた以上の意義を持つものとして推薦しようとは思わない。

念のためにことわっておくが、英語で書いた、非マルクス主義的立場のソヴェト研究を読んだり、援用したりすることを、アカデミック・スノビズムとしてはげしく拒否する一部のわが国のソヴェト研究者には、このような限定づきの推薦も正しくないと言われるかもしれない。そういう人には、本書の出たあとでも、社会主義諸国の貿易価格の決定は、何らのまさつなく行なわれてきたと書くであろうし、社会主義諸国間の貿易では一物一価であるという、事実を反した陳述を敢てするであろう。それは、人の勝手というものであって、評者のかかわるところではない。少なくとも本書は、それが事実とは反することを、証拠をあげて示し、ここから問題が始まることを示している。

上のような評者の評価は、また、より多く「西」側へ傾いた、そして、ロシア語やドイツ語の原文を読まないで社会主義貿易について判断しようとする人々——わが国では研究者の中にもそういう人々がかんり出てきた——にも気に入らぬと思う。ここで考えられうる反論を予想的に提示してそれにこたえる暇はないが、一言しておく、たしかに本書の中で使われているデータは現地でしこんだ原語の材料であるが、それにしても、これまでの貿易経験なり貿易論議のややドグマティックな(ドグマティックでわるければ非マルクス主義的といってもいい)提示にすぎないのであって、積極的な理論的分析とまではいい難いと思われる。

評者は、以上のような陥定づきで、本書を、日本の関係研究者に推薦したい。

IV

順序が逆になった。本書の内容を具体的に略述しておこう。序言や付録や参考文献表などを除いた本文は、大体4つの部分にわかれている。まず章別の目次を掲げておこう。

第1章 外国貿易の役割…………… I

第2章	貿易の計画と貿易組織の諸問題	} …… II
第3章	外国貿易組織の改革	
第4章	貿易活動の行動基準	
第5章	価格決定問題	} …… III
第6章	貿易相手国の選択	
第7章	ブロック内外国貿易体制…………… IV	

Iは、第2次大戦後1960年位までの約15年の社会主義諸国貿易の経過の叙述とその要約である。ここでは社会主義諸国貿易のアウトルキー傾向と1955年以後の専門化計画とが検出される。

IIは、外国貿易に関する各国内の問題(national problem)として、貿易機構と交易条件ないし貿易利益の決定基準の問題にふれている。第4章は、ソ連および東ヨーロッパ諸国で始まったばかりの、貿易利益の測定問題をくわしく紹介していて、興味深い。

IIIは、IIの国内問題にたいして、国際問題(international problem)を扱うかわけであるが、そのうち、第5章は、1956年のポーランド暴動を契機としてうかび上ってきた圏内貿易価格の決定基準の問題を歴史的理論的にかんりくわしく紹介している。そのひとつの結論として、著者は、圏内貿易で価格差別がおこなわれたことは事実であり、それには政治的理由も作用しているがもっとも大きい理由は、「貿易の当事者双方の相互的な貿易上の依存関係」the mutual trade dependence of the trading partners(p. 147)であると断定し、メンデルスハウゼン Horst Mendelshausen の先駆的ではあるが、かなり性急なソ連の一方的搾取説——それはわが国でも一部に信奉者がいた——を修正している。これは本書のメリットである。

IVは簡単に言うとセフの活動の紹介である。

V

わずかの紙数で、十分な内容紹介ができないのは大変残念であるが、ソ連および東欧諸国で、またセフの内外で、1956年以来、外国貿易の実務および理論について問題となってきたことの大要を、資料紹介的に概観したものとしては、大変便利な書物である。とくに第4,5,6章は、わが国では、日本語で書かれた紹介論文もほとんど無いこと故、原資料にもとずいた研究のできない人々には目新しくもあり、役にたつし、これから原資料にもとずいて、もっとちいた研究を進めたいという人には、現地での討論もこれから本格化してきようとする今日、これまでの論点や文献の整理という意味で、大いに役に立つと思う。評者は、社会主義貿易理論の百花争鳴期がこれから始まろうとする今の時点で、アメリカの新

人研究者によって、このような仕事を送られたことについて、いろいろな意味での感概を禁ずることができない。

[野々村一雄]

メイゼルズ

『工業成長と世界貿易』

Alfred Maizels, *Industrial Growth and World Trade*, N. I. E. S. R., Economic and Social Studies XXI, Cambridge University Press, 1963. pp. 563.

1963年の夏、ロンドンのNational Institute of Economic and Social Researchに所長のC.T.Saunders氏を訪ねたとき、「何かすばらしい書物が出ていたら教えてほしい」と云ったら、彼は書棚にあった本書を示した。このMaizelsの書物は総ページ、563頁に及ぶ重量感に溢れた大作で、Saunders氏によると過去5ヵ年にわたる研究の成果であるという。

1945年に故Folke Hilgerdtが国際連盟から出した*Industrialization and Foreign Trade*は、ある意味で本書と似かよった問題を取りあげた労作であり、今日まで数多く引用されてきた文献であるが、それは何といっても戦前に関する研究であるにとどまる。ところが、本書は1899—1959年の長期にわたって戦前・戦後の工業成長と世界貿易に対して包括的な統計的分析を加えたものであり、今後いやしくも世界経済を長期的に分析しようとする人々にとっては見逃がすことができない文献となることは確実である。本文中の統計表の数は169、グラフの数は42、そして付録中の統計表は99に及んでいるから、われわれは本書がどのような性質のものであるかを十分に知ることができる。1899, 1913, 1929, 1937, 1950, 1955, 1959年といった年次を主として benchmark years としてとりあげ、工業生産や世界貿易に関する微細な計数をまず分析可能な形に加工する。そのうえで、回帰分析や標準化法を利用して種々の帰結を導いている。したがって、それは統計の加工を中心とした分析が中心となっているが、それと同時に、それを越えた理論的・実証的研究をもあわせて提示している。

本書は大きく4部から構成される。Part Iは「工業成長および貿易のパターン」と題されており、工業成長、生産性、実質所得の関連の分析、工業成長のパターンの研究、工業化と貿易構造の変化がとりあげられている。Part IIは、「トレンドと諸関係」と題されていて、工業製品の世界貿易における諸傾向、工業化と輸出、工業化

と工業製品輸入、工業製品貿易における商品別・地域別パターン、主要工業国からの輸出に及ぼす競争ならびに輸入代替の効果、などがとりあげられる。Part IIIは、金属類、資本財、化学製品、耐久消費財、繊維衣服類、その他工業製品などに分けた商品群別の研究である。そして、Part IVが「今後の展望と諸結論」となっている。最後のアペンディックスでは、128ページにわたって、本文中に示された諸統計についての根拠や、一そう詳細な計数などを掲げている。

さて、著者が全体を通じて終始念頭においている問題点があることから始めねばならない。従来、1次産品生産国の工業化が工業国の販路を奪うものと考えてこれを危惧視する見解と、それが却って世界経済全体の拡大を支えるものとして観察する見解があったといえる。1925年のBalfour委員会の結論や1950年のRoyal Commission on Populationの経済委員会の結論は悲観的であった。KeynesやRobertsonも、技術進歩の国際間波及が国家間の比較生産費の差を縮小し、却って国際分業の後退をもたらすはしないかと考えた。

ところが、1950年代の世界経済の進展は、工業成長率ならびに工業国間の貿易の一そうの上昇をとめない、上記の悲観論は、一応打ち破られた感がある。注目すべきことだが、いまから約20年前に、Hilgerdtは工業化が1次産品の輸出のための生産を促進し、輸出力の向上を通じて工業製品の輸入増加をまかなうようになると考え、世界貿易発展の真の障害は工業化そのものではなくて、国際貿易に加えられた諸制限が撤去されないままになっていることだと考えた。このHilgerdtの見解は今日的段階においては十分再検討されるに値するものをもっている。そこで、MaizelsはHilgerdtのデータを改善・拡充し、さらに従来からTyszynski, Svernilson, Baldwin, Cairncross, Kindlebergerさらには、国連やガットなどによって展開されたこの方面の研究や統計系列を一そう前進させようとした。

このため、彼は1899—1959年間のいくつかの benchmark years について、主要工業国からの工業製品輸出額(ドル表示)を商品別、輸入先別に詳しく分類した'Trade Network' tableを作成した。注目すべきは、これらの系列がドルの current price 表のものだけでなく、輸出単価指数によってデフレートされた「不変価格」表示のものをも含んでいるということである。こういった貿易系列のほかに、彼は国内総生産、工業生産額、食料以外工業製品消費額などを引用あるいは自ら推計することによって、工業貿易、工業成長の両面の分析を推